《旅行者》スタンダール

――『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』を読むために

臼田　紘

1

現代の日本において、批判精神というものが存在するとすれば、どこでそれを見つけ出すことができるであろうか。少なくとも、わたしの周辺でそれを見かけることは稀であり、わたしの狭い視野からすれば、批判精神が衰弱しているのではないか、あるいはむしろ旺盛だったことがなければ、未熟なのではないかと思える。

例えば、わたしの生活は、新聞や雑誌、ラジオやテレヴィジョンといったジャーナリズムに浸されている。それがもたらすあふれるばかりの情報のなかから、わたしは適宜選択して、ページを開き、ダイヤルを回し、チャンネルをあわせている。そして、必要なときには、それらをコピーすることも可能である。しかし、総体的に見てそこに登場するものはどうも飽き足りない。そこには活発な精神の働きというものが感じられず、とりわけ批判精神に欠けているように思える。新聞や雑誌、ラジオやテレヴィにそれを求めるのは所詮ムリなことだと言われるかもしれないが、そう言って済ますわけにはいかない。批判精神なきジャーナリズムとは何なのか。とにかく、実際、それらを通して、読まされ、聞かされ、見せられているものの多くは、何も言わないための文体を工夫し、消しあう効果だけを狙っているかのようである。センセーショナルであるだけで、批判というものを鈍化し、つねに贋の客観主義の陰に隠れることに腐心している。その背後に、大衆の愚かな部分に媚び、体制に媚びている様子が透けて見える。新聞や雑誌、ラジオやテレヴィの右顧左眄ぶり、自己保身ぶりはあらためて書く必要はないかもしれない。現代では、これらが一つの役割を果たしたあとで消えていく、などということは考えられない。何の役割も果たさず、永久に存続することだけが目標であり、言論を無意味に（？）独占することを狙っているとしか思えない。それらが自分をあやうくするほどのキャンペーンをおこなっただろうか。批判の鋭さが権力をたじろがせただろうか。本質的問題にどれほど肉迫したろう

か。それらはまず自己批判をすることからはじめなくてはならない。だが、それこそそれらがどうしてもやらないことなのである。

新聞、雑誌、ラジオ、テレヴィなどでは、わたしたちは少なからず評論家と称する人たちの書いたものを読ませられたり、言うことを聞かせられたりしている。評論家と自称したり、そう呼んでもらいたがったりする人々が多いのに驚くくらいだ。批判精神がそうした人々のなかに見つからないのは当然かもしれない。それは水泡のような存在であり、そこに期待をかけるのは元来が無理なのかもしれない。彼らのなかで、世間に向かって大きな声で自分の考えを表明できる人は——そうした考えをもっていたとしても——ごく少数であるにちがいないし、その他の多勢は自分が対象として選んだものをなでさするのみで、ひと言として自分の言葉を発することができない。彼らもまた何も言わないために書いたり言ったりしている。もっとも、彼らが新聞、雑誌、ラジオ、テレヴィなどに使ってもらうために器（ときには公器と呼ばれているもの）に身の丈を合わせようとする限り無理からぬことである。

わたしには世間で知識人と呼ばれている人たちを見る機会がある。彼らの諸問題を討議する集まりを覗いてみると、討論は問題点をはずれて、無意味な質疑応答が二、三やりとりされるぐらいで終わることが多い。くだらぬ会議、くだらぬ会合、こう言った言い方がそこに集まる人たちが会議や会合を呼ぶその当の呼び方であるが、くだらなくしているのが自分たちであることを忘れている。確かにそうした集まりでは高邁なことがらが議題にのぼることはなく、どちらかというと俗な、しかも事務上の問題が多い。しかしたとえ義務で強いられたにせよ、自分を知識人と認めるなら、そうまで考えなくとも、ある分野におけるスペシャリストと考えるなら、それなりの対応の仕方があるはずである。ある時は多弁になる人が、この時には殻のなかに閉じこもり、わずかに幼児的な反応しか示さないというのも奇妙なものである。うじうじと自分の内で不満を燻らせたりしているのは批判精神からほど遠い。

わたしは、わたしの知らないところのどこかで批判精神と出会えると思っている。それでも、ごく平凡な生活を送っているわたしが、近くで批判精神を見出せないとなると、危機感を覚える。ひと度できあがった諸体制は安泰であり、安住し、そして堕落と腐廃への道がパースペクティヴのうちに見えてくる。いくつかは現実にその道に踏みこんでいるのではないのだろうか。批判精神のないところではそれすら見えないであろう。体制がそれの及ぶところに黴菌をばらまきながら腐廃を拡大していっても、腐廃の発酵を逆に喜んで貪る仕儀に立ち至ることになりはしまいか。帝国主義やファシズムがそのようにして助長されることを思い出さなくてはいけない。

わたしたちは今、言論の自由が憲法で保証されていることになっている。しかしそれは矢鱈とプライバシーを脅かす自由ではないと同時に、批判精神を発揮する自由である。言論の自由を手に入れているにもかかわらず。それを、意識的にではないにしても、自ら抑制してしまうことがどんな危険を孕んでいるか認識しなければならない。不充分に享受しているものを、失わないためと称して、批判を鈍らせ意識的に抑制をはかろうとするなら、体制側にとって言論の自由バンザイということになる。憲法で保証されているものは存分に享受することによって真価が出てくる。憲法で拒否されているものでさえ、既成の事実とすることができるのだから。

いずれにしても批判精神は緊張した関係のないところでは育ちにくいにちがいない。たてまえと本音ですべてを躱すことを是認するような場所では成り立つまい。批判精神は生き方とかあり方そのものと関わりを持っているのである。批判精神を見つけるということは、それを存在させるような場が生み出されているかどうかを見ることにほかならない。そうした場を自分のものにすることが、かく言うわたしの当面の目標であると思う。

わたしがアンリ・ベールの著作を読むたびに感じるのは、その活発な精神の働きとたゆみない批判の精神であり、またものを的確に見る目のすばらしさである。彼の感性とともに知性に賞讃を覚えるのは言うまでもないが、彼の視線にはいつも新鮮な驚きをもつ。彼の感性と知性に由来するこの視線は、とりわけ人間と習俗に鋭く突き刺さって、それらを見事に観察し把握する。ものごとをこんなにも「正しく」見ることのできる視線を、彼はどのようにして獲得することができたのだろう。勿論、彼の人間的な視線は偏見をまぬがれているわけではなく、個人的な感情に染まりさえする。これは当然のことだ。それでもなおかつ、それを越えたところで磁石の針は方向を見失わない。彼の精神は模索を繰り返しながら活動し続け、批判のうちに視線を生み出していく。

『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』（一八一七）は、ベールが三十四才のときに自費で出版した著作だが、やはり自費出版の音楽と美術に関する二つの著作についで、三番目のものである。わたしはこの「イタリア紀行」において、ベールの精神が若々しく躍動し、彼の批判精神が遺憾なく発揮されているのを感じる。とりわけ、この著作のモチーフはイタリアへの「愛」であり、ベールの心は一八一七年のイタリアの現状とその未来について考えるように自己を促している。そして彼はこのイタリアに対して何という視線を向けるのだろう。ベールはイタリアの音楽、美術、文芸、習俗、社会、政治、人間などを見ていく。彼は現在のイタリアとイタリア人を鋭く批判し、

また政治についてはこうしたイタリアとイタリア人の根底にあるものとして痛烈に攻撃していて、この著作を紀行よりも政治風刺書に近づけている。これは後年彼を危険人物と見なさせ、また、彼がトリエステ領事に着任するのをメッテルニヒに拒否させる原因になる。勿論、ベールは自分の書くことの危険性をよく承知している。彼はだからこそ、ドイツ人ないしドイツで任についているフランス人、騎兵士官ド・スタンダール氏に身をやつす。そしてさらに著作中に「パスポート」を設けて検閲の目を掻い潜ろうとする。そうまでしてベールがイタリアの政治を批判するのは、ベールが率直でしかも不正を見逃せないからだけではない。イタリアについてベールと同じ視線をもちえた人は多くはいないし、彼らがどんなに率直になり正義を重んじたとしても、彼のように書くことはできない。繰り返すが、この作品のモチーチはイタリアへの「愛」である。彼は愛するものが堕落していくのを見て、それに対して声をあげずにはいられなかった。イタリアとイタリア人の「堕落」の根底にあるものを見きわめ、それから目をそらすことが、彼にはできなかったのである。彼ほど一国民がいかに政治とかかわっているかを認識していた文人は少なかったし、政治のあり様が一国民をどのようにするかを見きわめていた旅行者もいなかった。

2

一八一七年のイタリアは、ほぼ全土がオーストリアのハプスブルク家の支配下にあった。オーストリアのハプスブルク家は十七世紀頃からイタリアへの野心を抱き、フランスとのあいだに確執を生じていたが、一七〇一年に起こったスペイン継承戦争によって、スペインの王座はフランスのブールボン家に渡したものの、スペインがイタリアにもっていた領土を手に入れた。ユトレヒトの和約（一七一三）でナポリ王国、ミラノ公国、マントヴァ公国、サルデーニャ島などのオーストリアへの帰属を認めさせたあと、スペインの反撃をおさえて結んだハーグ協定（一七二〇）、ポーランド継承戦争におけるウィーンの和約（一七三五）などによって、支配地域を統合して、ミラノからトスカーナ地方に至る部分を統治するようになった。その後、オーストリア継承戦争でパルマとピアチェンツァを失ったが、ロンバルディーア地方からトスカーナにかけてのイタリア心臓部の支配を確固たるものとし、さらにマリア・テレジアは、ナポリ・シチリア両王国やパルマ公国（いずれもスペイン系ブールボン家）そしてモデナ公国（エステ家）と結婚政策によって結びつきを企り、勢力圏を拡大していった。

この体制はフランス革命後、オーストリアとフランスのあいだで戦

争がはじまり、オーストリア軍がフランスのイタリア遠征軍に敗れたとき一旦互解した。一七九六年五月十五日フランスのイタリア遠征軍はナポレオンに率いられてミラノに入城した。ナポレオンは、ロンバルディーアにトランスパダーナ共和国をつくり、モデナと教皇領北部のロマーニャ地方にかけてチスパダーナ共和国をつくった。翌一七九七年にはこの両共和国とヴェーネト地方の一部を含めてチザルピーナ共和国を建国した。ナポレオンはイタリアを南下し次々と共和国をつくり出していった。一八〇二年北イタリアのチザルピーナ共和国は、ナポレオンを大統領、ミラノの貴族メルツィを副大統領とするイタリア共和国に改組された。しかし一八〇五年ナポレオンがフランス皇帝となると、イタリア共和国も王国となり、皇帝がイタリア王を兼ね、養子ウジェーヌ（妻ジョゼフィーヌと前夫ボーアルネとのあいだの子）を副王に据えた。ナポレオンはさらに旧ヴェネツィア共和国領の大部分、教皇領の一部を王国に併合、またピエモンテ、リグリア、トスカーナの諸地方とローマを含む教皇領南部をフランス帝国領に組み入れた。また彼はブールボン家をナポリからシチリア島に追い払って、兄ジョゼフを、ついで妹カローリヌの夫ジョアシャン・ミュラをナポリ王とし、モデナとピオンビーノを妹のエリーズ（エリザ）に与えた。こうしてイタリア半島はすっかりナポレオンの支配下に入った。

しかしナポレオンがモスクワ遠征に失敗し、フランス戦役に敗れて一八一四年四月六日連合軍に降伏、譲位すると、ウィーン会議で旧体制の復活が決められ、フランスでブールボン家の王政復古がおこなわれる一方、イタリアも旧支配に復した。オーストリアはロンバルディーアに旧体制時代のヴェネツィア共和国領を加え、ロンバルド＝ヴェーネト王国をつくり、直轄領として総督をおいた。またトスカーナ、ピオンビーノをトスカーナ大公のフェルディナンド、パルマとピアチェンツァをマリア・ルイザ（ナポレオンの妃マリー＝ルイーズ）といったハプスブルク家の身内に支配させ、モデナ、マッサ、カッラーラをハプスブルク家と縁戚にあるエステ＝ロートリンゲン家に委ねた。そればかりか復活した教皇領や、領土を旧に復したスペイン系ブールボン家、サヴォイア家などにも強い力を及ぼし、教皇領にはオーストリア軍を駐留させ、スペイン系ブールボン家の両シチリア王国とは条約を結んでこれを従属させた。

旧体制に復したイタリアでは、あちこちでナポレオンとフランスへの反動が起こり、ナポレオンがもたらしたものやフランス的なものを一掃しようという動きがあった。それと同時に一部支配者や貴族はとり戻した権力の強化を図ることに性急だった。ナポレオンの支配から解放されたと思った人たちは、間もなく主人が変ったにすぎないことを悟らされたにちがいない。ナポレオンの遠征以来約二十年間に揺す

ぶりをかけられた精神は、あと戻りに決して無関心でいられなかった。ナポレオンは解放者の仮面を被った略奪者であり暴君であったが、良かれ悪しかれその存在がイタリア人の精神に残した痕跡は大きく、彼らの意識を再び眠りこませることは不可能だった。ナポレオンの支配に反撥した者が、そのまま新しい支配者のもとで――彼らから何らかの利益を手に入れたものは別として――従順になれたろうか。自由主義者、共和主義者の据野が広がり、一方で民族主義者たちの動きが活発になりはじめていた。

ベールは一八一四年ナポレオンとともに没落した。官職から放り出された彼は、就職運動もままならず、七月二〇日パリを出発し、故郷グルノーブル、モン＝スニ峠を経て、八月一〇日ミラノに到着した。アンリ・ベールにとって四度目のイタリアであった。しかし前の三回と今度は事情がちがっていた。一八〇〇年十七才のとき、ベールはナポレオンの第二次イタリア遠征軍に加わり、グラン・サン＝ベルナール峠を越えてはじめてイタリアに足を踏み入れた。イタリアは幼いときに失った母親の先祖の国であり、彼にとって真の母国であった。彼はこのオレンジが鉢植えではなく地面から直に生えている土地で、オペラの感動を体験し、「ルクレッィア・ボルジア風の」美女と面識をもち、風景に感激した。彼は青春の約二年間を少尉として北イタリア各地で任務についた。彼のイタリア再訪は十年後、一八一一年の秋になる。参事院書記官兼帝室調度検査官のベールは休暇をもらうと、シンプロン峠を越えて九月七日ミラノ入りをした。彼は十年前に面識をもったアンジェラ・ピエトラグルアを恋人にし、ローマ、ナポリ、アンコーナへと足を延ばして、約七〇日間のイタリア滞在を充分に楽しんだ。彼はモスクワ遠征とドイツ戦線での任務のあと、一八一三年秋にも休暇を得るとミラノにやってきて、北イタリアで二ヶ月を過ごした。彼の背後にはナポレオンの威光があり、彼には地位も金もあった。

それに較べて今回は、一種の精神的な亡命者であり、休職手当をもらいながらの根なし草の生活を余儀なくされていた。彼がイタリアに求めたのは何よりも慰めであった。彼はミラノに着くと恋人アンジェラ・ピエトラグルアに逢いに行った。しかし秋にはアンジェラが別れ話を切り出し、ベールは彼女の気持が離れていくことに悩みはじめる。不和になったり、縒りを戻したり、彼はアンジェラにまさに翻弄され、結局、彼女と訣別するのに一八一五年いっぱいかかった。その間、彼は北イタリアの各地を訪れ、アンジェラとはヴェネツィアに滞在したりしている。翌一八一六年、ほぼミラノに腰を据えたベールはスカラ座に頻繁に通い、オペラおよびミラノの文学者たちとの歓談に時を過ごした。ロドヴィーコ・ディ・ブレーメ、ペッリコ、ボルジェ

リ、コンファロニエーリといった自由主義的な人たちと交際し、ディ・ブレーメからはバイロンを紹介された。

ベールにとって、旧制度への復古後はじめて訪れたイタリアが昔ほど明るく見えなかったとしても不思議はない。それは単にイタリアの変化、彼自身の境遇の変化によるばかりでなく、愛惜の魔力が過去を何倍も美しくし、現在をもの足りなく感じさせたにちがいないのだ。

3

『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、一八一六年一〇月四日ベルリンを出立し、ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ボローニャ、フェッラーラ、アンコーナ、ヴェネツィア、ミラノ周辺といったイタリア各地を巡り、一八一七年八月二十八日フランクフルト・アム・マインに帰着する日記体の紀行文である。

しかしながら、これはベールのイタリア旅行の忠実な日記ではない。彼は一八一六年十二月八日ミラノを出発してフィレンツェ、ローマ（十二月十三日―一月二十六日）そしてナポリ（一月二十八日―二月末）と旅をするが、一七年の三月四日にはミラノに帰ってきている。紀行文は日付と場所の点で彼の現実の旅行と大きく異っている。わずかに書き記されたこの時のベールの日記と対比してみると、ナポリでは『ローマ、ナポリ……』に書かれたようにフィオレンティーニ劇場で『ポールとヴィルジニー』を観たりしているが、『ローマ、ナポリ……』のナポリに至るまでが、現実の旅行の出来事にのっとって書かれているという根拠はない。それはそこに書かれている歴史的事実のいくつかをベールの現実とつきあわせてみれば明瞭であろう。例えば、ナポリのサン＝カルロ劇場の開場の日は、『ローマ、ナポリ……』に記されているように、一八一七年一月十二日であるが、ベールはその日はまだローマに滞在していて、ナポリへ出発するのはその二週間後の一月二十六日なのである。ベールはこのように自分の出席できない場に騎兵士官ド・スタンダール氏を立ちあわさせる。さらには、スタンダール氏をロッシーニに会わせたり、現実になかったことまでも実現させる。『ローマ、ナポリ……』の出来事はかなりの部分がフィクションだと言ってよいであろう。

だが、この著作には源になることがらが存在する。それは一八一一年八月末から十一月なかばにかけてのベールの二回目の旅行である。この旅行の際には、彼は仔細な日記（とくにナポリまでとミラノの部分）を綴っていて、彼の訪れた場所、見聞したもの、出会った人、起こったことがらなどについて記している。ベールは一八一三年にこの日記を「イタリア紀行」としてまとめて出版しようとし、旅行中に紛失したローマ滞在の日記に代わるものをあらためて記憶をたよりにロ

述筆記したり、ナポリの音楽についてガランティの著作を抜粋して書き加えたり、手を入れている。結局、これは出版されないまま保存されていたわけだが、『ローマ、ナポリ……』の執筆にあたっても、この日記が利用された形跡はない。しかしこれは、彼がこの年の旅行の記憶を『ローマ、ナポリ……』のなかに甦らせているらしいことを推測させるいくつかの証拠を与えている。

この源泉に、いくつかの資料から引いてきた材料をまとわせているが、まず第一に、ゲーテの『イタリア紀行』がベールの著書の役に立っている。ゲーテのこの著作は『わが生涯より――詩と真実』の続編として一八一六年春に第一巻、翌年秋に第二巻が出版されたが、これはゲーテが一七八六年九月から八八年六月にかけておこなったイタリアの旅の記録である。ベールは愛読していたスコットランドの雑誌『エディンバラ評論』の第五十五号（一八一七年三月）でその第一巻の書評を読み、そこに英訳されていた引用文を利用した。『ローマ、ナポリ……』で剽窃が明らかな個所は五ヶ所ほどで、ゲーテの見聞を巧みに利用している。そればかりか『エディンバラ評論』の『イタリア紀行』に関する批評の一部をも自らの考えのように用いている。それに果たして『イタリア紀行』はベールに剽窃を促しただけなのだろうか。推測にすぎないが、これは、イタリアの旅について一冊の本を書こうという考えを彼に再燃させた直接の動機ではあるまいか。ベールがいつ『ローマ、ナポリ……』を計画したか判っていないが、エグロンと契約を結んだのは一八一七年六月十七日パリでのことである。その半月前に『イタリア絵画史』の最後の原稿を印刷所へ入れている。『絵画史』の仕事の完成が目前に迫った四月ないし五月頃にイタリア旅行記の出版を思い着いたものと解される。ベールは自分の愛するイタリアに関して『ヴェルテル』の著者の向こうを張って一冊をものそうと思わなかったろうか。レーゲンスブルクをあとに南へ向かうゲーテを追うかのごとく、スタンダール氏はベルリンを立って行く。そして本文中のゲーテに対する挑戦的な言辞はどうだろう。ベールは一八一七年三月五日出版屋のピエール・ディドに『絵画史』の献呈先を一覧表にして送っているが、そのなかにゲーテは入っていない。しかし九月十五日エグロンに送った『ローマ、ナポリ……』の献呈者名簿には加えられている。これはどういうことを意味するのだろう、彼が一部を盗用したその本の著者へ、著書を贈るということは。そこには並々ならぬ自負心がこめられているのではないだろうか。ついでだが、『ローマ、ナポリ……』を読んだゲーテは当然そこに自著からの剽窃を見てとるが、ツェルターに「彼（スタンダール）は惹きつけ、反感を起こさせ、焦らして、結局、読者は彼から離れられなくなる。何度読みかえしても何か新しい魅力を感じる、言々」（一八一八年三月八日）と書き送り称讃している。

さて、『ローマ、ナポリ……』の源泉としての一八一一年の旅行に加えて、『エディンバラ評論』第五十五号所載のゲーテ著『イタリア紀行』の書評の利用をあげたが、ベールは他にもイタリアについて書かれた本を利用している。ディジョン高等法院院長シャルル・ド・ブロスの『イタリア書簡』（一七九九、筆者の死後に出版）である。はじめはド・ブロスの名をあげてその意見に反撥を示しているが、あとでは黙ってド・ブロスの考えや見聞をそのまま利用している。

ベールが『ローマ、ナポリ……』で利用したものをたどっていくと際限がないようだが、『エディンバラ評論』は、ゲーテの書評だけでなく広範に用いられている。ベールは一八一六年九月ミラノでロドヴィーコ・ディ・ブレーメからこの雑誌の存在を教えられ、そのバックナンバーを蒐めはじめた。そのおもな記事を翻訳してみたりしているが、早速執筆中の『イタリア絵画史』のなかに第四十九号所載のハズリットの記事（シスモンディの『ヨーロッパ南部の文学について』に関する記事）を利用した。『ローマ、ナポリ……』では、五月十一日付のアルフィエーリに関する記述や、五月三十日付のパリのサロンに関する記述などで長々と剽窃しているほか、この雑誌から得た情報をフルに利用していることが明らかになっている。この時期のベールにとって、『エディンバラ評論』は知識の尽きない源泉であるが、間もなくこの雑誌はベールの考え方、ものの見方に大きく影響を与えていくのである。

4

『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、いわばスタンダール氏を主人公とするフィクションである。ベールはスタンダール氏の訪れる場所、見聞するものについてを自分の記憶や資料によって構成する。資料に出典を示さず剽窃の疑いをかけられたり、歴史的事実に些細な誤りを生み出し批判を受けることを気にしていないかのようである。ベールは彼がとりこむあらゆるものを使って、そこに一八一七年のイタリアを再現させようとする。それは後にベルテ事件を核として一八三〇年のフランスの年代記をつくり出す方法にまでつながっている。またベールがスタンダール氏を登場人物にしてイタリアを旅させる方法は、スタンダールがアンリ・ブリュラールを登場人物にして生涯を語らせる方法につながっている。

スタンダール氏を主人公とするフィクションは、ではどのように組立てられているか。先にも述べたように、この著作は日付をもった旅日記の体裁をとっている。この日付がベールの現実と関連性をもたないとなると、何を意味しているのだろうか。これが一八一七年という年代に深く根をおろしているということはない。日付をもった歴史上

の出来事として、ネー元帥夫人のオペラ観劇とかサン＝カルロ劇場の再開場とかが記されているが、それがどれほどこの年代を特徴づけることになろうか。それどころか、日付そのものに無頓着な誤りまでが見られる。一月二日、ローマのスタンダール氏は劇場に張り出された禁止条項を見て、知事のティベーリオ・パッカのやり方に触れるが、パッカが知事になるのはまだ三ヶ月以上もあとのことである。これは日付に歴史記述上の役割を放棄させるだけでなく、日付の有効性をみずから否定するようなものだ。彼は自分の語ることの真実性を強調するとき、本文中に括弧付で日付を挿入することをしているが、そうしたことを無に帰してしまう。すなわち日付と同時に内容の真憑性を逆に失くすことになる。現実の日付と偽の日付が入り混じり、現実の出来事と虚偽の出来事が交叉していることが露呈する。

このことは地名に関しても同様である。もともと観光ガイド的要素はないから、この本をもってイタリア各都市を巡ることなどは不可能なことだ。具体的な土地の記述が極端に少なく、なかにはロレートに代表されるように、町について全くどんな点からも書かれていない例もある。地理的な説明や風景については、ローマやナポリ、ボローニャ、アンコーナ、ヴェネツィア、ミラノ周辺などでわずかに記されているが、ミラノ周辺を除いてはほんの一、二行で、別な記述のついでに触れられる。名所ないしは記念建造物についてはどうだろうか。ポポロ門、システィーナ礼拝堂（ローマ）、ストゥーディ（ナポリ）、ポンペイ、ヴィッラ・メルツィ（コモ湖畔）をはじめとしていくつかの名前が登場する。しかし、それらが仔細に観察されることはない。例えば、ポンペイは「興味深いもので」「二つの劇場が発掘されている」といった程度の記述である。ポポロ門は、ド・ブロスの称讃（それがどのようなものかは示されていない）に反論をとなえるだけである。いずれにしてもスタンダール氏の記述から彼の訪問地についてまとまったイメージを形成することは難しい。そして日付と同じ無頓着ぶりが地名にも見られる。文中に登場するオルビテッロとかパレストリーナという地名は正確にはどこのことなのだろうか。ほんとうにオルベテッロとかペッレストリーナの誤記なのだろうか。そしてまたリーヴァとはリーヴァ・ディ・キャベンナの省略か、あるいは方角ちがいと思える文字どおりのリーヴァなのだろうか。日記のうえでナポリとペストゥムを日帰りで往復するスタンダール氏のことである。離れた土地を自在に訪れることもありえようし、実在の土地ばかりか架空の土地が入り混じることさえあるのかもしれない。

こうした日付と場所（時間と空間）のなかでの主人公スタンダール氏の行動についてはどうだろうか。その行動を跡づけることはたやすいことではない。彼が訪れたと称する場所から彼はするりと抜け出し、日記の記述はいつのまにか他に転じている。ベールがスタンダー

ル氏をロッシーニに会わせたりしていることは既に述べた。スタンダール氏は旅の途中でこのロッシーニのほかバイロンをはじめとして有名無名の多くの人と出会う。しかしその大部分は出会った瞬間にたちまち現実から遠ざかってしまう。スタンダール氏の行動のなかで明瞭なのは、観劇だけと言ってよいだろう。もっとも、これこそ彼の旅の一つの目的となっている。劇場におけるスタンダール氏には存在感があり、そうたやすくは逃げ出していかない。ベールの記す劇場風俗もこの紀行のなかでもっともよく描かれているものの一つであろう。

しかし、とにかく、日付や場所、そしてスタンダール氏の行動に至るまでが、この紀行文では衣裳として存在していると言っても過言ではない。それらは欠くべからざる衣裳である。現実と空想とが混ぜあわさったり、現実が描かれたり描かれなかったり、具体的になったり抽象的になったり、様々な織り方で織られた衣裳である。そしてそれらが包んでいるのは生きのいい観念である。この衣裳によって観念は地についたものとして受けとめられる。

否、そういった様々な現実こそが観念に生命を与えている。それが衣裳だとすれば、それを着ることによって観念の形をつくり出すようなものだと言えよう。ベールは自分の記憶や読書を通じて、空想的に一八一七年のイタリアを旅行し、日付や場所やスタンダール氏にとらせる行動など、努めて現実的、具体的なところから入って行く、また

は入って行くそぶりを見せる。そうしながら自分を観念の方へ導いていく。具体的ことがらを文章に書くか書かないうちにもはや観念のなかに身を晒している。誘発された観念のほとばしりこそ、衣裳のなかで躍動する実体なのである。

ベールは『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』のなかで、イタリアの音楽、美術、文芸、習俗、人間についての考えを次々と述べている。とりわけ序文でも言っているように音楽（オペラ）にまとをあてている。スタンダール氏は町に到着するや劇場へ急ぎ、そこで聴いた音楽の楽しみについて書き記す。しかし、音楽にしても、美術や文芸にしても人間の精神の産物であることを熟知するベールは、人間を見ることを怠らない。イタリア人の習俗と、彼らの置かれた社会的政治的状況に、彼の考えはたびたび立ち戻ってくる。彼の考えは停滞せず、かといって既成の筋道に乗って進展することもなく、たえず自分の記す対象によって触発された新しい考えによって、自分の考えを乗り超えようとする。したがって、彼の著作のなかから相矛盾する考えを探し出そうと思えば細部においてはそれも可能である。しかし、考えの方向を微調整しながら、さらに本質をつく考えへと飛躍する。

では結局、彼は一八一七年のイタリアとかイタリア人をどのように

考えているのだろうか。彼は現在のイタリアは音楽を除いたあらゆる面で決定的に不振に陥っていると考える。ベールによれば、共和国の栄えたエネルギーにあふれた時代のあとで興った専制政治が、すべてを扼殺してしまい、イタリアを沈滞におとしいれた。そして一七九六年にフランス人がイタリアを目覚めさせたが、しかしイタリアはみずから起きあがろうとせず、結局支配者のなすがままにまかせ、一八一四年の好機も利用できないで、相変らずの不振をかこっている、と言う。イタリアの民族は専制政治によって魂がしぼんで、無知と怠惰が甚しい。彼らは本質的には善良な気質と自然さをそなえ、幸福を生み出しやすいにもかかわらず、純真さを失い、人を信じず狡猾で残忍でさえある。それも確固とした法や正義を求められないときにはやむをえない。とにかく、こうした行動原理を授けたのが専制政治である。ベールはおおよそ以上のように考えている。さらに、民衆のあいだにある自分の町や地方に対して抱く異常な郷土愛（したがって他所に対する敵対心）とか文化人や知識人のあいだにある衒学ぶりを指摘し、それらがイタリア再生の妨げになっていると言う。

ベールはこうしたイタリアに対し、いらだちを覚え、時には腹立たしさを抑えきれずに強い調子になる。彼はイタリア人に現状を見つめるように説く。そして「民族はみずからが強引にもぎとるだけの自由しか獲得しえない」ことを囁き、彼はしきりと二院制を目ざすことを提案する。

勿論ベールは二院制に至るまでの手だてなど具体的なことは書いていない。王政復古下の時代である。そこまで書かなくとも、彼は充分すぎるくらい危険な発言をしている。それに彼の考えでは、一七八九年に始った革命は未だ終っておらず、革命が現在も続いていると見ている。彼の言葉を引けばこの革命は「一八三〇年にヨーロッパ全体で二院制が施行されて」終結を見るはずだと言うのである。革命が継続中だという発言は、権力を掌中におさめたばかりの体制にとっては認めがたいものであろうし、大胆このうえない。

彼は活発な観念のなかに権力者にとっては何とも危険な考えを混じえているのである。それはまず紀行文の衣裳の下に隠し、次に諸観念にまぎらしながら、鋭い針先をのぞかせる。彼が突くのはイタリアの政治ばかりではない。気がつくと、それは一つの針山にも似ていて、ベールの鋭い視線にとらえられた考察が堆積している。彼は愛国心からフランスに対してはいつも手厳しいが、イタリアにいるスタンダール氏もヨーロッパ的な視野からフランスを批判している。

ベールが台本作家アネッリに関して言うように彼も「迂回前進」しながらことの本質へと迫っている。すなわち、先にベールのイタリアとイタリア人についての考えをまとめたが、彼はそれを決してまとまった形でなど表明してはいない。仮りにそんなことをすれば、とても

著書を公刊することはできなかったであろう。彼は散発的に鋭く突いては手を弛めることを繰り返す。「自由の騎兵」として時には退きながらも少しずつ打撃を与えていく。彼の批判とは、まさに振り返って見てはじめてその強さを知らされるような力を秘めているのである。

解　題

騎兵士官ド・スタンダール氏著『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、一八一七年パリのエグロンで自費出版され、ドゥローネーとペリシェの両書店から発売になった。一八一七年九月十三日号の『フランス新刊目録』に予告されていることから見て、九月中旬頃発売されたと考えられる。これがいわゆるパリ版である(図版a)。

これに対し、同年ロンドンで出版され、コルバーン書店で発売されたフランス語本が、いわゆるロンドン版である。これには著者名がなく、一方で「これらの有名な都市の社会、風俗、芸術、文学などの現状」という副題が付されている。そしてパリ版との相異はそれのみならず、本文にも多少見られるのである。

そうなると、問題はこの二つのどちらの版が先に出版されたか(オリジナルか)ということである。当時の出版事情として本国よりも先にロンドンで出版されたり、パリとロンドンで同時に発売されるということもありえた。ロンドン版には出版の日付に関する手掛りは残されていないが、十一月に『エディンバラ評論』第六十二号にこの版の書評が出ているので、それ以前に発売されたことは明らかであろう。結論的に言えば、パリ版はロンドン版に数週間先んじていると推測されている。スタンダールは、パリ版に関しては、出版社とのあいだにとり交わした契約の内容や売行きについて、何かしらの記録を残しているが、ロンドン版については皆無である。この年八月に行なわれた彼のロンドン旅行は、この本の出版に多少の関係があったのかもしれない。

このロンドン版は翌年英訳され、カウント・ド・スタンダール著で同じコルバーンから発売された。この翻訳はスタンダールに何のことわりもなかったようだが、彼は満足した。訳はひどく、勝手な省略もあった。パリ版の成功*とこの英訳本の出版に気をよくして、彼はただちに「第三版」を企図した。手持ちの本に書きこみをしたり増補原稿を書いたりして、早くから着手したが、結局出版は一八二七年になる。これが『ローマ、ナポリ、フィレンツェ(第三版)』である(図版b)。

一八二六年版と呼ばれるこの新版は、一八二七年二月二十四日号の『フランス新刊目録』に予告され、ドゥローネーから二巻で発売され

た。大幅な増補で、旅程も一八一七年版とは大きく異っている。** 逆に新版では削除された個所もある。実質的には一八一七年版と一八二六年版は別のものと考えた方がよいだろう。

しかしながら、その後のスタンダールの著作集などでは、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』はすべて一八二六年版を中心にして編集されている。すなわち二六年版を採用し、その補遺に二六年版では切り捨てられた一七年版の三分の二を収録するという方法であり、これはまず一八五四年にロマン・コロン編集のミシェル・レヴィ版でおこなわれた。そして、ダニエル・ミュレールのシャンピョン版（一九一九）、アンリ・マルティノのディヴァン版（一九二七）の二つの代表的全集本でもこのかたちが踏襲された。こうすることが一八一七年版を無意味なものにしてしまっているということに、気づかれなかったかのようである。

パリ版、ロンドン版以降の最初の『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、一九五六年になってやっと出版された。アンリ・マルティノ（一八八二―一九五八）による評釈本である。これは『一八一八年のイタリア』を併わせて収めたものでル・ディヴァンから出版された。この版でマルティノ氏はパリ版をもとにロンドン版をつきあわせながら本文校定をおこない、一八一七年版の定本ともいうべきものをつくりあげた。注釈も細部にわたって施され、この作品の世界にはじめて本格的な照明があてられた。

『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』は、その後、一九六四年に、マルティノ氏の業績に負うところが多いポケット版がロラン・ボワイエの解説と注によって、ジュリヤール書店の《文学》という叢書から出たきりだった。しかし一九七三年になって、マルティノ氏の研究をふまえてさらにそこから前進した優れた版がデル・リットによって完成した。これがプレイヤード版スタンダール『イタリア紀行文集』所収のものである。デル・リット氏はその大部な一巻に、『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』と『ローマ、ナポリ、フィレンツェ（一八二六）』をそれぞれ別なものとして独立させて、『一八一八年のイタリア』および『ローマ散歩』とともに収めている。一八一七年版はここでもパリ版をもとにロンドン版によって校定されている。デル・リット氏は学位論文『スタンダールの知的生活』に結集した研究を土台にして、詳細な注をつけている。とりわけイタリアの文献による傍証は出色で、マルティノ氏の評釈版の欠落を見事にうめた行きとどいた版にできあがっている。

さて、この日本語訳だが、この成立には時間的な経過とともに曲折がある。翻訳ははじめディヴァン版全集本を底本におこなわれた。その後、分量的な問題と訳者の考えの変化から、初版（一八一七年版）の形に近いものでまず出そうということになり、マルティノ氏の評釈

版をたよりに改稿がほどこされた。ところが、そうするうちにデル・リット氏のプレイヤード版が出版されたので、それによっていくつかの訂正がおこなわれた。この版では、原注の位置一ヶ所に前二者とずれがあるが、こちらを採用して、訳注のなかで指摘しておいた。またこの版ではスタンダールの記す個有名詞のなかに誤りを見つけて、これを訂正している。そうした訂正がこの作品の場合に適切なことかどうか疑問があるが、それらを採用させてもらった。いずれにしても翻訳は翻訳以上のものではない。日本語として通りのよいものとするために、第三版（一八二六年版）と一八一七年版を諸本によってたえずつきあわせ、表現に相異のあるときは、日本語にした場合わかりやすい方を採るようにした。

訳注はおよそ四百項目にわたって付けてあるが、そのかなりの部分はマルティノ氏とデル・リット氏の業績に負っている。愚考、愚注によって先駆者の仕事を薄めた責任は一切訳者にある。

スタンダールによって書きこみのおこなわれたテキストがいくつか存在するが、それらは、1、チヴィタヴェッキアのブッチ家に残されているいわゆるブッチ本、2、印刷に関する注やいくつかの訂正の入っているもので、のちにストリヤンスキーのコレクションに加えられたのでストリヤンスキー本と言われているもの、3、一八二六年版だが一八一七年版と重複するところに附注のある通称ル・プチ本、である。これらのマルジナリアも評釈版から取捨選択して以下の訳注のなかに採り入れられている。

＊　パリ版は全部で五〇四部印刷され、およそ九三〇フランの経費を要した。スタンダールは一八一七年八月までに印刷屋に七〇五フランを前金で支払っていたが、発売後少しして残金を完全に支払うことができた。自家用ないし宣伝用の一二〇部を除いた三八四部のうち、二二六部が一八一八年三月までに売れ、一八二〇年までに残部を売りきった。スタンダールの手には、諸経費差引きで一二〇フランあまりの利益が入ったと考えられる。

＊＊　一八二六年版の旅程は次のようになる。ベルリン、ウルム、ミュンヘン、ミラノ、パヴィア、ピアチェンツァ、レッジョ、ボローニャ、フィレンツェ、ヴォルテッラ、カステルフィオレンティーノ、シエーナ、ボルセナ、ヴェッレトリ、ローマ、テッラチーナ、カプア、ナポリ、サレルノ、ペストゥム、オトラント、カタンツァーロ、ナポリ、ローマ。